

平成十六年三月 現代密教 第十七号 抜刷

身体的存在への回帰

鈴木晋怜

身体的存在への回帰

鈴木晋怜

改造される身体

「スプリットタンって知ってる？」

「何？ それ。分かれた舌って事？」

「そうそう。蛇とかトカゲみたいな舌。人間も、ああいう舌になれるんだよ」

男はおもむろにくわえていたタバコを手に取り、べろっと舌を出した。彼の舌は本当に蛇の舌のように、先が二つに割れていた。私はその舌に見とれていると、彼は右の舌だけ器用に持ち上げて、二股の舌の間にタバコを
はさんだ。

「…すごい」

これが私とスプリットタンとの出会い。

「君も、身体改造してみない？」

身体的存在への回帰

男の言葉に、私は無意識のうちに首を縦に振っていた。⁽¹⁾

平成十五年度下半期の芥川賞を受賞した『蛇にピアス』の冒頭部分である。スプリットタンとは、舌にピアスをして、その穴をどんどん拡張していった、残った先端部分をデンタルプロスや釣り糸などで縛り、最後にそこをメスやカミソリで切り離して完成させるらしい。

普通感覚からすれば、想像するだけで身震いするような、こうしたおぞましい行為が、一部の若者の間で行われている。彼らは身体改造と称して、様々な方法で自らの身体を改造していく。実際、インターネットで検索すると、身体改造に関するホームページの数と過激さに驚かされる。ボディピアスや刺青に始まり、焼き印を押し当てたり傷つけたりして皮膚に模様を描くスカリフィケーション、皮膚下に立体的なジュエリーを埋め込むインプラント e t c。そこには最早、単に流行とかファッションという範疇ではなくくりきれないような若者達の呻きが込められているようにさえ思われる。

この小説の主人公である十九歳の女の子ルイも、何かに追い立てられるように次々と身体改造をしていく。肩から背中にかけて大きな刺青を入れ、ろくな食べ物も摂らず身体をガラガラに痩せさせ、舌にあげたピアスの穴を急激に拡張させていく。そして、サディスティックな男とのセックスに身を委ねるのである。

一体、何が彼女をそうした過激な身体改造に向かわせるのであろうか。
彼女の内面は次のように描写されている。

現実味がない。今自分が考えている事も、見ている情景も、人差し指と中指ではさんでいるタバコも、全く現実

味が無い。私は他のどこかにいて、どこかから自分の姿を見ているような気がした。何も信じられない。何も感じられない。私が生きている事を実感出来るのは、痛みを感じている時だけだ。

彼女にとっては、自分の身体を改造することが、あるいはその時に感じる痛みだけが、唯一の生きている証であり、それによってかろうじて他者とながり、自己を確認しているのだろう。身体こそが彼女を支えている最後の砦となっているのだ。彼女にとっては、理性や精神性や言葉など何の意味もたない。あるのは極めて具体的に即物的な身体とその感覚であり、それだけが彼女を現に生きる存在として実感させ、世界を形成しているのである。

身体を改造することによって、あるいは身体を傷つけることによって自己を確認していかうとするあり様は、何もルイのような小説の中の特別な若者だけに見られる現象ではない。現代社会において、現実に生きている若者の中にも、同じような仕方で自己を確認している者が少なからずいる。リストカットや自傷行為を繰り返す者、過食や拒食、過激なダイエットにのめり込む者。彼らは皆、自らの身体を改造したり、傷つけたりすることによって、自己が確かに存在することを確認し、さらには身体を加工することによって、自己そのものも変化し、新しい自分に生まれ変わることができると感じているのではないか。言うなれば、自分の身体こそが自己を表現する最終的な手段であり、自己と他者、自己と世界とをつなぐ究極的な媒体となっているのだ。

こうした現代の若者のあり様は、近代の行きつまりや歪みからの参照のようにも思われる。なぜならば、近代は余りにも身体を疎んじ、その感覚を疎外してきたからである。

西欧思想にあつては、人間の身体はいつも理性や精神の下位におかれ、それはむしろ悪の源として疎外されて

きた。宗教的伝統においても、神は非身体的な精神として捉えられ、それがすべての基本になった。人間も神の似姿である限り、その本質は、やはり非身体的な精神として考えられている。また、神は純粋な精神であり、善であるのに対して、人間は身体的存在であり、身体的欲望をもっている。身体的欲望は悪への傾向をもち、それを減することが人間の目標であるとして、身体的欲望は否定されてきたのである。

近代になって、この理性的精神の重視と身体疎外はさらに明確なものとなった。近代哲学の始まりとされるデカルトの言「我思う故に我あり」でもわかるように、コギトという精神の働きが第一原理として立てられている。デカルトにとっては、人間の存在様式において最も本質的な事実はコギトの主体であることであって、身体は二義的なものでしかない。

さらに、現代文明は、ますますわれわれの身体を疎外していく。産業構造の変化は、自然に身体が直接的に働かかけたり、自分の身体を使って労働をするという経験の場を減少させ、それに変わって、道具や機械に媒介された労働あるいは物との直接的な接触を必要としない記号や情報の操作による労働を増加させていく。すなわち、われわれと世界との関係の持ち方が、自分の身体によって直接的に世界を感じ、体験するというものから、何かを介在させて、それを通して間接的に感じ、体験するというものへと質的に変化したのである。

テレビやインターネットをはじめとする通信技術の発達によって、現代人は、自分の部屋に居ながらにして世界中の情報を集め、知ることができる。戦争さえもあたかもテレビゲームを楽しむかのような感覚で見ることができるようである。空気やにおいや雰囲気や温度など、われわれの皮膚や身体で直接、感じることなく、世界のすべてをわかったような気になれるのだ。

また、人間同士のコミュニケーションのあり様も大きく変化してきた。人と人が直接的に対面して、相手の

顔や仕草を見たり、声を聞いたり、においを感じたり、体に触れたりしながら、コミュニケーションを図っていくという基本的な関係性の構築の仕方から、相手の顔も表情も声もわからないまま、メールやチャットを通じて親密な関係性を構築していくという仕方へ変化し、直接的な身体的接触をもたないまま、あたかも深いコミュニケーションをもったように錯覚している現代人も多い。

このように、現代は、いろいろな面において、身体と世界との直接的な関わりというものが軽視され、身体は二義的なものあるいは克服されるべきものとして疎外されている。しかし、われわれが身体を疎外すればするほど、実は、われわれの心もまた疎外されていくのである。哲学者の市川浩は、身体と心の関係について、次のように述べている。

ところが身体を疎外するということは、それだけではすまない。デカルトが、感覚というものは心身合一体に由来するんだ、ということをおりませけれども、そういう身体に結びついた感覚というものが、身体を疎外することによって疎外される。現実感覚が変質してしまうという現象が起こってきたわけです。つまり、感覚というものは、何かものを見る場合でも、それは私の感覚だという、自己性というか、親しさの感じを常にともなっているわけですね。そういう自己性あるいは親密性が、身体を疎外することによって、感覚から失われていった。物も人も見えてはいるが、見ているという感じがしない。そしてまたわれわれは、感覚を媒介にして、世界とか、他者と同調する、シンクロナイズする、シンパシーをもつという面があるわけですが、それも失われていった。⁽³⁾

ここで、市川も指摘しているように、われわれが身体を疎外するということは、それに伴う感覚、さらには、自己と他者あるいは世界との親密性、同調性も失われていくのである。すなわち、身体を疎外することは、ただそれのみにとどまらず、結果として、自己の全体が世界から疎外されるという現象を引き起こすのである。

そして、冒頭に述べたルイに代表されるような現代の若者のあり様、すなわち、自分の身体を改造し、傷つけることによって、自己を確認し、それによって世界とのつながりを保とうとするあり様は、実は、身体性を疎外され、それによって心までも喪失してしまった現代人が、もう一度、自己の根源としての身体に戻っていかうとする営みなのではないかと思われるのである。その意味においては、そうした行為は、前述のように近代の反照として捉えることもできるし、また近代を自然からの逸脱として捉えるならば、彼らの行為はむしろ自然への回帰として考えることもできよう。

しかし、彼らが決定的に悲劇的なのは、身体を改造し、身体を傷つけることによってしか、そこへ戻っていけないということだ。自然へ戻ろうとしながら、最も自然から逸脱した行為へと走ってしまう。疎外された身体を回復するために自ら身体を攻撃するという何とも言えない逆説がよけいに彼らを苦しめているような気がしてならない。

われわれが、真に帰るべき身体とはどのようなものであるのか。あるいはもともとわれわれの身体とはどのようなあり方をしていただろうか。次にこうした問題について考えてみたい。

身体と言語

前述のように、現代社会において、われわれのコミュニケーションのあり様も大きく変化してきた。他者との

直接的な接触によってコミュニケーションを図るものから、コンピューターや携帯電話を介在した、すなわち相手との直接的な接触を伴わない言語のみによるコミュニケーションが横溢している。しかし、こうした傾向は、ある意味では近代の、さらにはその延長としての現代の当然の帰結として捉えることもできよう。なぜならば、近代において、理性的であり主知的であることは近代人としての重要なファクターであり、人間と動物を区別するのは、人間がロゴスを所有しているからに他ならないと考えるならば、人間同士が理解しあうためには、純粹に言語のみがあれば十分なわけで、そこに相手との直接的な接触など必要としないからである。近代的人間とは言語によって思考し、理解し、伝達する存在なのである。

身体と言語の関係においても、まず言語があつて、それに伴つて様々な身体的動作や行動が引き起こされると考えるのが一般的である。たとえば、身振りや手話のような言語に対応した身体の動きは、言語がまず先にあつて、後からその代わりの役割を果たすために作られたものであるよう見える。

しかし、子どもが言語を習得する際、それは単に知的な作業過程のみだけで行われるのではなく、身体の動きと密接に繋がっているという。正高信男著『子どもはことばをからだで覚える』の中に興味深い報告がなされている。⁽⁴⁾

新生児の赤ちゃんは、生後四ヶ月くらいになると、声を立てて笑うようになる。それまでは、いわゆる新生児的微笑とよばれる微笑みはあるが、声を立てては笑わない。そして、生後四ヶ月の赤ちゃんが声を立てて笑うという行動は、決してそれだけが単独で現れるわけではないという。下肢を何度も繰り返し蹴りながら笑うのである。さらに笑い声と下肢のリズミカルな動きが同期するようになっていく。それが生後五〜六ヶ月くらいでピークを迎えると、今度は六〜七ヶ月にかけて手の動きと同期して笑うようになる。さらには、この笑いと手の動きの同

期が、人が操る音声の最も初期の形態である喃語（「バババ・ダダダ」のように音節が複数あり、各音節が子音プラス母音の構造を持つている発声のはじまり）と手の動きの同期に繋がっていくのである。すなわち、言語の発声の始まりは身体の動きと共にあるということである。

言語と身体が不可分に結びついているという現象は、言語の発声に限ったことではない。

同書の指摘でさらに興味深いことは、子どもの「視点動詞」（「行く」、「来る」）の正しい使用と、身体動作が結びついているというものである。たとえば、「きょう、遊びに来る？」と一方が尋ねたならば、他方は「うん、遊びに行く／いや、遊びに行かない」というふうには、相手が「来る」と尋ねたならば「行く」で応じ、「行く」で尋ねられたら「来る」で応じなければ、正しい応答とはならない。こうした使い分けは、小学校低学年レヴェルでは意外と難しいらしい。実験によれば、小学校一年生で正答率は五四％程度である。次に、視点動詞を正しく使用できる子どもと間違っている子どもの発話時の様子をモニターで観察すると面白い現象が起こっていた。「行く」「来る」という語が口をつくときに、身体も微妙に動くのである。そして正しく使用できる子どもは、「行く」という語を発する場面では、自分の身体を中心より外側に向かって腕ないし手を動かさず、すぐさが多数を占め、「来る」という動詞を発する際は、反対に自分の身体を中心に向かって、外側から腕ないし手を移動させる動きが多数を占めるのである。正しく使用できない子どもは、身体の動きと「行く」「来る」の移動の意味との間に関連がない場合が多かった。

要するに身体動作と言葉が結びついたときに、初めて子どもは正しくその言葉を使用するということである。さらにその後の実験では、動詞の発話を習得する以前に、まず、それぞれの語の表す運動パターンを、忠実に反映する身体運動の発現が先行することが確かめられている。

こうした実験を踏まえ、正高は次のように述べている。

言語習得が、社会によって共有されている一定の記号体系の獲得をめざすものであることはいうまでもない。だが、すでにふれたように、どのようなことばであれ、記号として対象を純粹に恣意的に表象するとは考えられないし、それだからこそ、他者との自然な相互交渉の中で習得可能なのである。(中略) 語彙を構成する個々の音韻の産出すら、特定の身体感覚をベースにして初めて可能となってくる。まして、より恣意性の高い記号の使用法を身につけるに際し、われわれが身体感覚をフルに活用することを求められるのは当然といえ、当然のことである。

(中略) どのようなことばであれ、実際には、「からだ的思考」の介在なしには習得不可能な⁽⁵⁾のだ。

身体的存在への回帰

正高も指摘するように、元来、身体と言語とは密接不可分に結びついているものではないだろうか。いわば、身体と言語とは一体なのである。しかし、現代においては、身体と言語とが切り離されている。言語から身体性が消し去られてしまっているのである。従って、そこで語られることばは、頭では理解することができても、あるいはコミュニケーションの一つのツールにはなり得ても、お互いが根源的に共感し、身体感覚のレベルでその意味を共有できるような力を持ち得ないのである。ことばはことば、身体は身体というふうには、元来は一体だったものが仕分けされ、結果としてわれわれは全体性を失ってしまった。そして、それは、自己と世界とのつながりをも遮断してしまったのである。すなわち、身体的な感覚と意味とが切り離されたことによって、われわれは、世界から疎外された個人的な空間を生きざるを得なくなってしまうのである。

冒頭に述べた身体を改造することによって自己を確認する若者達は、まさにこの個的な空間を生きようように思われる。身体を改造し、他者と自己の身体を格別することで、そこに自己の意味を見出し、また、その自己と同じように身体を改造する他者との間でのみ、お互いの意味を確認し、かろうじてそれを共有しているのだ。ここにおいても、意味を共有するために、身体を個別化していくという逆説を見ることができるのである。

身体の両義性

そもそも身体が個別的にあるということは間違いない。人は生まれたときから、自分の固有の身体をもっており、それを他者の身体と重ね合わせることはできない。どんなに愛し合っていようが、どんなに理解し合っていようが、それぞれの身体は個別的に存在する。身体と身体とが空間の中で別個の位置を占めている意味において、身体は常に個別的にあると行うことができる。

しかし、その一方で、その個別的な身体同士が出会うとき、その身体は、互いの動きに共感的に反応しあう。例えば、共鳴動作と言われるものがある。目の前にいる相手の身体の動きを見ると、それが自分の身体に共鳴したように同じ動きをするというものであり、この現象は、生まれて数日の赤ちゃんに既に見られることが知られている。赤ちゃんを抱き上げて、顔と顔を三〇センチほど離して互いに見合う位置に保ち、大人が口をゆっくり開閉してみせると、やがて赤ちゃんは徐々に口を動かしはじめ、相手と同じ口の動きをするようになる。この時、赤ちゃんには、動きをまねようという意図はない。ただ身体が相手の身体に直接的に反応し、反射的に相手の動きをなぞるのである。さらに、生後六ヶ月の赤ちゃんにレモンの輪切りをなめさせると、赤ちゃんは口をつけたとたんにいかにも酸っぱいという顔になる。そしてしばらくしてその赤ちゃんの目の前で、大人がレモンの輪切

りを口にくわえるふりをすると、赤ちゃんは自分がレモンをなめたときのように酸っぱい顔になる。赤ちゃんは自分で見た相手の状況を自分に取り入れ、それと同じ表現をするのである。

こうした共鳴動作は、身体が自由になればなるほど増えていく。あくびがうつるのは誰しも経験したことがあるだろうし、格闘技を見ていると自然と体に力が入る。あるいは、演奏会で演奏の合間にひとりが咳をするとなぜかそれほど咳をしたくない人まで咳をしてしまう。これらの動作もまた、われわれが意図的に模倣しているわけではなく、人が身体をもつて生まれてきたときから、すでにそのように組み込まれているのである。発達心理学者の浜田寿美男は、こうした現象を身体の子定性とし、次のように述べている。

身体というのは、それ自体で完結しないようになっていく。つまりあらゆる身体は、他者の身体を予定している。そうしてみるとさきの共鳴動作もそうした予定性の一つであることがみえてくる。赤ちゃんは目の前の相手の顔やそのなかの口を視覚をとおして見る。しかし、自分の口は視覚的に見ることができず、触覚的・筋肉運動感覚的にしか捉えられない。このように自分の口と他者の口はそれぞれ違った感覚様相のもとに捉えられて、それらを照らし合わせる術はない。にもかかわらず目で見られた他者の口と、身体の内側から感じられた自分の口とが、同じ口として共鳴する。こうした現象をみる限り、人は最初からたがいに同じ身体つきをもつものとして、たがいにその身体をとおして応じ合うことを予定されていると考える以外にない。⁽⁶⁾

すなわち、われわれの身体は、個別的に存在するものでありながら、しかし、個体として個別に完結することはありません。言い換えるならば、身体が個別的にあるからといって、その個別的な身体を単

位として見ることのほうが不自然だと言うのだ。身体と身体とは、反応しあい、影響しあうようにできているのであり、われわれの身体は、自分の意図とか意志とかが関与するその前段階で既に、他の身体と、さらには身体的世界とつながり、影響し合っているのだ。この意味において身体とは、本源的に個別的でありながら、同時に共同的存在であるという両義的存在であると言えるであろう。

さらにわれわれのこうした身体の反応は、単に物理的な身体空間にとどまるわけではなく、もっと広い範囲にまでわたる。例えば、自分の身体と直接的に接触していなくても、あまり近い距離に他者の身体が近づいてきたとき、不快な息苦しさを感じる。あるいは、いつも自分が座っている座席に他者が座ると、自分の身体が侵されたような気分になる。

このように自分の身体、あるいは身体的世界は、現実の自分の身体をはるかに越えて拡張していく。実際に身体的感覚を味わうのは、(いまここ)にある自分の身体であるにもかかわらず、もつとずつと大きな世界を自分の身体的世界として感じることもできるのだ。

身体への回帰

前述のように、われわれと世界とのかわりは、まず身体を通して形成される。また、われわれを人間たらしめている言語あるいは意味の獲得も実は身体感覚を通してもたらされているのだ。あるいは、われわれが純粹に知的な能力として捉えている記憶でさえ、そこには明らかに身体が関与している場合が多い。身体感覚によって記憶されている、すなわちからだだけが覚えていることは容易に消えないし、それはしばしば、われわれに決定的な影響を与える。思い出の中にある異性の匂い、肌の感触……。われわれの行動は、身体に刻印された記憶によって

規定されているとさえ思える。そして、われわれの精神もまた身体的記憶が核となって形成されていく。哲学者
鷺田清一は次のように述べる。

家庭という場所、そこでひとはいわば無条件で他人の世話を享ける。言うことを聞いたからとか、おりこうさんにしたからとかいった理由や条件なしに、自分がただここにいるという、ただそういう理由だけで世話をしてもらった経験がたいていのひとはある。こぼしたミルクを拭ってもらい、便で汚れた肛門をふいてもらい、顎や脇の下、指や脚のあいだを丹念に洗ってもらった経験……。そういう「存在の世話」を、いかなる条件や留保もつけずにしてもらった経験が、将来自分がどれほど他人を憎むことになろうとも、最後のぎりぎりのところでひとへの〈信頼〉を失わせないでいさせてくれる。そういう人生への肯定感情がなければ、ひとは苦しみが堆積するなかで、最終的に、死なないでいる理由をもちえないだろうと思われる。(中略) まさぐられ、あそばされ、いたわられる経験。人間の尊厳とは最終的にそういう経験を幼いときにもてたかどうかにかかっているとは言えないだろうか。⁽¹⁾

家庭という親密な場所で営まれる濃密な身体的接触。明確な意識や自我が未だ形成される以前の、この身体の記憶が人間の尊厳の核になるという鷺田の指摘は、まさに身体的存在としてのわれわれのあり様を端的に言い当てている。

身体的存在としての自己。われわれはもう一度、そこへ回帰する必要があるのではないだろうか。それによつてこそ、自分が他者と世界と宇宙と、じかに繋がっていることを文字通り実感することができるのだ。

身体が疎外されてしまった現代社会において、若者達は、彼らが純粹で、繊細であればある程、その根源的な疼きを感じている。だからこそ彼らは、身体を回復すべく、またそこへ回帰すべく、自らの身体を傷つけ、改造するのだ。あるいは、他者と共感するためにこそ、身体を個別化させていくのである。

しかし、そうした仕方には、やはり無理がある。またそこに現代の悲しさがあるのだ。スプリットタンをもつ恋人アマを失った時の、ルイの呻きはこの悲しさを象徴しているように思う。

一体、どうして、どうして私の事を置いてったのよ。涙が止まると怒りがこみ上げてきた。歯をくいしばっていると、顎が痛くなった。ガリ、と口の中で嫌な音がした。舌で口の中をまさぐると、虫歯だった奥歯がかけていた。私は欠けた歯をかみ砕いて飲み込んだ。私の血肉になれ。何もかも私になればいい。何もかもが私に溶ければいい。アマだって、私に溶ければよかったのに。私の中に入って私の事を愛せば良かったのに。私の前からいなくなるくらいなら、私になればよかったのに。そしたら、私はこんな孤独を味わう事はなかったのに。⁽⁸⁾

身体とは、もともと、それだけで充分に共感的であり、世界と繋がり、世界に開かれていたはずなのに、また、何もしなくても、われわれはその身体を感じることができたはずなのに、現代は、そのありのままの身体を疎んじ、隠蔽してしまった。そして、今、われわれは、身体を取りもどすために、身体を破壊するという矛盾の中にいる。

われわれは、まず、身体に与えたステイグマを取り払うことから始めなければならないのではないだろうか。身体に対するわけのわからない後ろめたさを棄て、身体をそのくびきから解き放たなければならぬのである。

そして、文字通り、身体に身をまかせて、即身に生きていくのだ。

〈引用文献〉

- (1) 金原ひとみ著 『蛇にピアス』（集英社 二〇〇四年）三頁
- (2) 同書 九四頁
- (3) 市川浩著 『精神としての身体』（講談社学術文庫 一九九二年）一九頁
- (4) 正高信男著 『子どもはことばをからだで覚える ―メモロディから意味の世界へ―』（中公新書 二〇〇一年）参照
- (5) 同書 一六八頁～一六九頁
- (6) 浜田寿美男著 『「私」とは何か ―ことばと身体の出会い―』（講談社選書メチエ 一九九九年）一一四頁
- (7) 鷺田清一著 『悲鳴をあげる身体』（PHP新書 一九九八年）七二頁～七三頁
- (8) 金原ひとみ著 『蛇にピアス』（集英社 二〇〇四年）一〇一頁

〈キーワード〉身体、言語、両義性、回帰